

同人誌 (2017年1月号)

風狂

風狂の会

詩

独白	北岡 善寿
忘れ物	なべくら ますみ
てつわんあつとむくんのたいけん(Ⅱ)	長尾 雅樹
波のふるさと／犬吠埼にて	金 得永
市場の森	高村 昌憲
新年を迎えて	高 裕香
階段の下	神宮 清志
タクラマカン	出雲 筑三

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界(十四)	三浦 逸雄
-------------	-------

長編詩

自由への脱出	原 詩夏至
--------	-------

翻訳

アラン『わが思索のあと』(三十)	高村 昌憲 訳
------------------	---------

執筆者のプロフィール

読者からのコメント(2016年12月号)

多摩川が崖下に流れる
宮の平の庭園の陰では
今年も蛇がああ赤い
人を惑わす舌をぺろぺろ
陽炎のように揺らして
時を食んでいるのだろうか
アズの季節
トレドの風景を心に引きずる
男の記憶が蛇行する
いつか田舎の坂で鍬を担いだ
女と何事かを語った
馬鹿が増えれば利巧が潤う
と言ったような気がする
今日は何曜日か
世間のことはもう何も
解らなくなってしまった
ジーザス・クライスト！
なんて叫んだこともあったな
記憶は人を混乱させるだけだ
「魚は釣れませんね」と言ったら
「ええ 釣れません 跳ねていますがね」
石の転がる川での会話はつまらない
アンダルシアでは何を見ましたか
丘の上から広い畑が見えたよ
青梅に似ていませんか
似すぎていたよ
この世にあるものだからな
生きている人と死んだ人と
何処がどう違うか判りますか
私は黙って生まれ黙って死ぬよ

これで形而上学はおしまい

頭が常夏のように暑い

なんという陳腐な比喻だ

頭が稲光りすると言えるか

まだ真昼の一時

どこかで沢を走る水の音が聞こえる

今日も見つけられないまま
公園はずれの草叢にあるサッカーボール
忘れられてから何日目
持主はどんな子

今日もベンチに置かれたままのジャンバー
これから暖かくなる時期だから
良いようなものの
忘れて行ったのはどんな子

今日も砂場に
半分埋まったままの小さなシャベル
気が付かれることはあるの 忘れたことを
持主はどんな子

いつの間にか
草叢からなくなっていたサッカーボール
ベンチのジャンバーも
砂場の小さなシャベルも

みんな思い出されて
持主の元に帰ったに違いない
暖かい手に包まれて
遠くの方から幼稚園児たちの歌う声が聞こえる
忘れていった子はあの中の一人かも知れない

すべてこのよはみんしゆしゆぎの
よのなかでありまして
いまはせんきよのまつさいちゆう
ええ……でありまして
その……なんでありますが……しかし
この……ということは
でありますからして
このことは
ということでありますが
あの……ええ……
そのわけは……
「えんぜつしているひとはだあれ
ちっともきこえないじゃないの」
ワイワイ ガヤガヤ
ワイワイ ガヤガヤ

にじゅういつせいきのみらいは
みんなみんなバライロでございますと
きこえるようでありますが

〈画面転換〉 〈がめんてんかん〉
すな こいし きてつ がんぺき
ようこうろ えんとつ ひこうせん
はりがね はぐるま てっぼう かくへいき
谷底カラ天ヲ望メバ
空ノ色ハ曇リ日ノ灰色ナリ

海辺の鷗よ羽が無いではないか

くるくる回る脳天回路ヨリ
「せいぎのみかたはだあれ」 「いつもいつも
ゆびおりかぞえているひとだあれ」

共同墓地は宇宙船に乗って
遠い未来の星へ飛んで行きます

何しろ地球は狭いものですから
墓地など作る土地はありません
火葬にしたら骨粉は人工衛星に乗せて
謎の星になるまで宇宙の外へ飛ばすのです

きっと霊魂も一緒に行ってしまうのでしょう

絶えず寄せ来る海原の波
波の故郷は風か
波は歳月に押され
金の砂を吐いて風となる

絶えず寄せ来る苦悩の波
苦悩の故郷は私か世の中か
人に押され仕事に押されて
黄昏の白髪に伝える

絶えず寄せ来る海原の波
波の内にひそむ風の歌
千万年をザワザワと
声もなく命を伝える

* 本作品の日本語への翻訳は金一男氏による。

売り手の商人は売りたいくないのか
最初はそんな顔付を見せている人
買い手の主婦は買いたくないのか
始めはそんな仕草を見せている人

売りたいくないし買いたくない二人
そこから市場の規則が定まるのだ
売りたい価格が言われる様になり
買いたい価格も言う様になるのだ

二人の間に広がっていた術策は
孤独の心から協調する心になり
お互いに見えてきた信頼の心は
不変の事物に映る公正価格の森

窃盗と泥棒は同意無しで奪う行為
権力者の強制では枯れてしまう森
売り手と買い手は理性の師らしい
自由に思考しないと知恵を失う森

一軒の家は三人の師で建てると言う
事物に働きかける師と販売する師と
損益などを計算する師が住むと言う
今は平和を武器に知恵と共にいる人

一生80年を一日24時間に例えると
もうすぐ還暦で午後6時を迎える
働きを終えて 夕食の時間だ。

そう言えば 東の空から太陽が昇り
また、西の空に沈むところを
一度も見納めたことがない。

そんなに忙しく働いてきたのだから
薔薇の花を浮かべた湯船につかり
身体をゆっくり休め清めよう。

夕食は、たくさんの栄養はிரらない
蒸し鳥や蒸し豚とナムルをあてに
仲間とワインで人生を語ろう。

そして、独り静かに
偉大なるクラシック音楽を聴く
ドの音に乗って宇宙旅行に出かけるのだ。

階段の下

そこにはいつも

憂愁がひそんでいた

街路の風に

漂っているのは

壊れた夢ばかり

一瞬の幻想に疲れ果て

戻ってみれば

冷たい空気

階段の下に来ると

そこにはしっかりと

憂愁が控えていた

タクラマカンは地名ではない
かつてシルク織物の生産地として
ペルシャまでふたこぶラクダで交易した地域

楼蘭王国のロク王女は
絹の部屋に絹衣をまとい
それは美しいミイラで発見された

親も恋人も一度入ったら二度と帰って来ない
それがタクラマカン※の由来
豊かな胡楊の森を覆い尽くした大流砂

地下水路は今も脈々
岩盤があがるとオアシスになる
改めて響く命の水のありがたさ

タクラマカン
生きて千年 枯れて千年 倒れて千年
はるか悠久の砂丘に射す古城の夕陽

※ウイグル語



三浦逸雄「立つひと」30号（油彩）

昔
灼熱の綿花畑に
一人の
奴隷の少年が
住んでいた。

利発で俊敏
雄弁で健康な
その子は
農場の
全ての奴隷たちの
希望だった。

彼は走った。
彼は踊った。
太陽は
どこでも
少年を照らした。
彼は笑った。
彼は語った。
星々は
いつでも
少年を見守った。

「全く！
おまえを見ていると
ここが 異国で
俺らが 異人の
軛の下にあることが
嘘みたいだ！」

老いた奴隷の一人は
そう語った。
その男は まだ
祖父から聞いた

海の彼方の
象と 麒麟と
〈自由〉の闊歩する
故郷の大陸の話を
覚えていた。

「そうとも！
本当に嘘ならいいのに！」
「そうだ！
それなら
俺たちが 俺たちの手で
その嘘を 本当にしてやろう！」

奴隷たちは
密かに相談した。
そうして
或る晩
その子を逃がした。

「さあ！ 走れ！
走って 必ずたどり着くんだ
あの 象と 麒麟と
〈自由〉の闊歩する
俺たちの本当の故郷まで！」

少年は走った。
農場の全ての奴隷たちの
声援と 希望を
背に受けて。
懐には
貧しい ありったけの
餞別と 愛とを
抱きしめて。

しかし
農場と
他の奴隷主の
農場を仕切る

柵に阻まれ
少年は
捕まってしまった。

「馬鹿め！
殺してやろうか？
だが、それだけではつまらん！
よし、こうしよう！」

農場主は
引き据えられた
少年の懐から
仲間の奴隷たちの餞別を
抜き取った。

「小僧、貴様の勝ちだ。
貴様と 貴様の仲間の夢は
俺様が 確かに受け取ったぞ
この通り！」

農場主は
少年の目の前に
きらびやかな
家僕のお仕着せを
投げ出した。

「抜け目のない小僧よ
取引成立だ！
貴様は 貴様の仲間の夢の
餞別で たった今
俺様の 馬車の馭者の座を
買ったのだ！」

翌朝
農場の全ての奴隷たちは
信じられないものを目にした。
あの晩
確かに逃がした筈の少年が

今
きらびやかな家僕のお仕着せを着て
農場主の馬車の
御者台から
馬を
農場を
昨日までの
かつての仲間たちを
見下ろしている。
その姿は
見ようによっては
あの 象と 麒麟と
〈自由〉の闊歩する
故郷の地を 颯爽とゆく
誇らしげな戦士とも見えた。
但し
見ようによっては
そのパロディーとも……。

「いやいや！
あいつは頑張っているんだ！
考えてもみろ
昨日は奴隷
今日は家僕
ほら 大した〈一歩前進〉じゃないか！
あの 象と 麒麟と
〈自由〉の闊歩する
俺たちの本当の故郷は
きっと この道の先にあるんだ！
そうとも！
あいつの旅は
あいつの冒険は
きっと まだ始まったばかりなんだ！」

あの 老いた奴隷は
声を張り上げた。

「何ということだ！
期待外れの小僧よ
おまえの旅は
おまえの冒険は
こうして もう終わってしまったのか！」

唇を噛み
拳を握り締め
そう 叫びたいのを
必死で 堰き止めて。

「そうだよ！
凄いよ、あの兄貴！」

まだ幼い
奴隷の子供たちも
また叫んだ。

「そうとも！
俺だって
いつか必ず
旅に出るんだ！
ここから脱出して！
自由を求めて！
あの兄貴みたいに！」

だが 彼らの心には
あの 象と 麒麟と
〈自由〉の闊歩する
彼らの本当の故郷など
もう なかった。
その視線は
ただ
農園主が投げ与えた
きらびやかな
新しい家僕のお仕着せに
ギラギラ
釘付けになっていた。

「ハイヨーッ！」
少年の鞭が馬を打ち
馬車は
晴れやかに動き始めた。
その姿は
見ようによっては
かつての主人を
凛々しく先導する
新しい時代の
若い 力強い
新しい指導者を思わせた。
但し もちろん
見ようによっては
そのパロディーとも……。

「さあ、出発だ！」
「行くんだ、どこまでも！」
老いた奴隷の 苦い
はたまた
幼い奴隷の子の 脂っこい
声を限りの歓声を浴びながら
馬車は動き出した。
灼熱の綿花畑に
苛酷な労働に
彼らを全員置き去りに
ただ
主人一家の
怠惰な 気晴らしの
物見遊山の旅に
ごとごとと。

その間
農場主は
馬車の窓を
ぴったりと閉ざして
姿を見せなかった。

己のやり口の
あまりの悪辣さに
さすがに気が咎めた？
いやいや
とんでもない！
彼は ただ
笑い転げていたのだ。

だが その声は
いつまでもやまない
奴隷の歓声と
走り出した
馬車の車輪の音に
掻き消された。

聞いていたのは
ただ 馬を鞭うつ
かつての
奴隷の少年
ただ一人だった。

そして
そのことが
また それなのに
聞こえぬふりをして
ただ 肅々と
馬を鞭打ち
馬車を走らせる
その背中が――、

農場主を
更にまた
ひいひい
嘶くばかりに
笑わせるのだった。

感情

私は従って愛を第一に吟味しました。先ず気付いたのは、自由のない愛は、愛ではないということです。自由がなければ、自分が自由であると信じませんし、最早他に如何なる自由も信じないと私は理解します。本質的にはこの人間嫌いの人、実際に愛の劇である有名な喜劇の題目にもなりました(1)。幾つもの発条が現れます。情熱が湧き上がり、そして再び沈みます。情熱は如何なる段階にも止まることが出来ません。もしも再び湧き上がらないなら、沈んでいなければなりません。高邁なアルセスト(2)は、自分が自由であることを知りたいと思いますが、それは出来ません。彼は、セリメーヌ(3)が自由であるように望みますが、それも出来ません。ここで読者は私より早く跳び上がります。というのもこの主題は、全生活が彼のものであるからです。私としては何時も極限に興味があり、自由であることを少しも気にしないアルセストに、人が考えるかもしれないことを自問します。それはアルセストが自由な人を愛さず、愛されもせず、気に入ることもなく、尊敬することもなく、猫を捕らえたり逃がしたりする様に恋人を捕らえたり逃したりしていることです。この表現はバルザックのもので、彼が応用している『幻滅』のフロリーヌは、全てが暗黒の地獄から遠くありません。しかしながら彼女は、一種の高邁な心によって逃げ出します。しかし女性の交際まで分析を進めて下さい。私たちは殆ど地獄にいます。そこから、何の愛もない眠りの深淵が見出されます。もしも愛がそこで生まれるなら、愛は自らを解放しますし、他者も解放します。この弾道は信仰が無いなら高く上がりません。あるいは寧ろ最初の疑問に負けて仕舞います。アルセストも最早高く上がることは出来ません。それはセリメーヌの明らかな下劣さにあると言われます。でも違います。というのもそれでは全ての問題を取り除いて仕舞うからです。寧ろ、悪魔のようなやり方で自由なセリメーヌは完璧に自由です。アルセストが望んだ様に、全てが完全になるのは少しも望んでいないと私は思います。アルセストの愛が再び燃えるのもそこです。何故でしょうか。セリメーヌは絶えず彼女自身や彼自身に従うために十分に愛さなければならなくなるでしょう。彼自身というのは、修道院を意味します。そして女性たちの様に男性たちも修道院を生まれました。修道院を迷信で説明するのでは非常に物足りないものです。修道院は人が自由に愛する場所であり、最早強制出来る場所ではありません。私は、大戦後に書いたプロポ集にこれらの分析を沢山所収しました。これらの分析そのものには少しも曖昧さはありません。それらは疑う余地が無いのです。寧ろ曖昧さはそれらの思考の結果と、他にもっと隠されている観念とに結びついた関係の中にあります。それ故に私は、こう言って良ければ私の「精神の記録」であるこの部分について少し述べて行きたいと思います。

確かに愛する人々は如何なる人々も、第一に魂を愛することに多くの驚きを持ちます。しかしながら、媚薬の使用が彼に嫌悪を催させると理解するのは単純です。それは彼がそれを使用しないと云いたいものではありません。彼は高く低く、地獄から天国へ、天国から地獄へ行く情熱を消

矛盾は、全てがそこに集中しているのが分かります。何冊かの出版物からお分かりになったと思いますが、私が読んだのはスタンダールとバルザックです。ユゴーとトルストイも、私のお気に入りの哲学者のものよりも沢山読みました。ここでお分かりのように、読者の喜びが私の研究の基本でしたし、それらの探検が表面的には一致していない様に見えても、ついには一致して出会う様になりました。私はここで小説家や詩人たちを引用して、私が自由の仕草を通して真実と思っているものを、彼らが発見していたことを、私のやり方で説明しなければなりません。コルネイユにおいて非常に輝き、ルイ十三世風でもあるデカルトの観念が如何に体系的一覧に沿っての愛情を最初に論じたか、そしてそれ以前に神秘的な〈神学〉の意味合いが全く人間的であることを今一度発見することに私を導いたか、それらに気づいて戴ければ十分です。神は高揚した魂の本質的な証人であり、それは私たちの叫びも率直にそれを表していて、更に罵り言葉もそうであるのが極めて一般的であり、常にあらゆる意味を私に与えているように見えました。それ故に〈神〉は、あらゆる愛という想像上の家族の様なものでもあります。しかし、〈神〉はまさしく想像力以上のものです。〈神々〉のことはもっと後で述べます。

私は、味も素っ気も無い乾ききった吝嗇家が、やり方によって神秘的になり得るとはとても当初は考えませんでした。けれども屢々私は、吝嗇家について一種の名誉回復に導かれました。何故なら結局のところこの情熱には、無私無欲の公正な態度があり、富裕に対する大変に賢明な見方もあるからです。それはアルパゴン(4)の激しい肖像と一緒に出来ませんでした。しかし恋人たちにも地獄があるように、吝嗇家にも地獄があったのはまさしくあり得ることです。でも何故でしょうか。吝嗇家の樂園は高邁で自由であり、そして自由の友人なのででしょうか。私はまさにそうであると思います。情熱に関するこれらの驚異的な分析は、お金や高利から生まれるのですが、私には経済学を明らかにしてくれます。しかしここでも又、哲学の本よりも私が発見したのは寧ろ小説の中でした。今は、私が偉大なるディケンズのお世話になったものを彼に返す時です。読者は、コパフィールドの上着を購入してもお金を支払おうとしない吝嗇家の商人のことをご記憶でしょうか。苛立っている吝嗇家のこの亡霊は、吝嗇が決して避けられない矛盾によって動かされています。というのも、吝嗇家は盗みを働きたいのですが、盗むのは怖いからです。そして商人は誰もが、誠実さが商売の魂であることを良く知っています。私はここで吝嗇は誠実であること、つまり心が引き裂かれて悲痛でいることに気付きます。

私の発見はこれで終わりではありませんでした。労働が市場を豊かにすることも吝嗇家は良く知っています。耕作すること、取り入れること、穴を掘ること、採掘すること、運搬すること、それらは富裕の源泉です。そして、吝嗇家は偶然に生きるのも決して好きではありません。反対に、秩序や几帳面さや安全が好きなのです。それ故に、吝嗇家は浪費家を屢々利用しますが、決して浪費家が好きではありません。アルパゴンが物を貸すのは、吝嗇の第一段階でしかありません。暇人たちに貸すのは長く続きませんが、反対に労働者に貸すのは何時までも取引になります。吝嗇家は労働者を探します。吝嗇家は労働者が好きです。しかし取分け、吝嗇家は吝嗇家を探します。そしてそのことは、吝嗇の農民から銀行家までの相違を私は考えて仕舞いますが、

銀行家は農民を最良のものに育てて行きます。一方がもう一方に鞭を打っているこの二人の吝嗇の関係は、至る所で見受けられます。若くて熱心な女中は、夢の中で家を建てることを考えます。もう一人の吝嗇家がそのことを見抜いて、彼女にお金を貸します。吝嗇家は、良く知っている吝嗇家の美德に賭けます。吝嗇家は馬を大切に扱うように、債権を持ちながらも大切に扱います。何故なら仕事は一連に繋がっているからです。例えば、もしも家を建てるか工場を建設するなら、石切場や鉱山が重要であり、同様に鉄道も道路も航行も重要であるからです。以上は吝嗇家がこれらのことを知って、出来ることならその貴重な活動を全て速めたいと渴望する理由です。常にもっと稼ぎたい欲望と労働の連鎖が分断される恐怖は共にあります。この状況は殆どが瞑想的であり、まさしく公益を瞑想するのも同じです。年齢の影響を加味するとこの種の活動は、吝嗇から美德を完成させますが、それは節制です。この様な仕草を取ることで最初は吝嗇になりますが、結局は解放されるようになります。というのもこの仕草は、無用な支出であるからです。しかし、その時は何という多様性がそれらの仕草にはあるのでしょうか。泥棒は殆ど何時も浪費家です。泥棒は、浪費すべきことしか好きではありません。吝嗇家はお金を貯め込みます。しかし全てが擦り切れます。それ故に吝嗇家はお金を愛します。土に埋めた宝物を持つ吝嗇家も、既に吝嗇の一変種です。そのうちの高利貸しも、もう一つの変種です。符号と信用と約束で生活していて、公正な法律を尊重します。事務機構を管理するのに巧みな人に関しては、吝嗇と言うよりもその意味では寧ろ屢々浪費家です。自分自身や企業のためなら、お金を支出するのも厭いません。彼らは全体で、高利貸しが隠れたリーダーになっている大企業を形づくっています。

稼いでいても、必要性を越えて非常に稼いだがっている吝嗇のことを、人々はびっくりします。吝嗇の乞食が宝物を守って何もそこから生まないことも、人々はびっくりしています。これらの逆説は、愛と同様に欲望が吝嗇の中にも支配されているのを理解させてくれます。そしてもしも、吝嗇が時として事業の全ての道を占めるまで企業に拡大するなら、それは取分け人がなし得ることと、なすべきことを見るからであり、又誰もが彼のように見ていないと思っているからです。私はそこに一種の野心と愛を見出します。結局のところ認識によって、そして秩序への愛によって、吝嗇家は無料診療所や学校から病院や寮まで全てを設立します。

私はそれ故に、愛の如き吝嗇という一種の弁証法を見付けました。それからあらゆる感情の如きあらゆる情熱の始まりに戻りながら、私は構造と好機による活動で大変良く名付けられた情動という感情をもう一度検討しました。私はそれを痙攣的なものと理解しました。というのも情動は他のものになり得ず、対象さえも破壊するからです。最高の吝嗇は、食べることの陶醉に見ることが出来るように思います。しかし私は、翌日に備える思想に驚嘆しました。最高の愛とは気に入られることへの陶醉であり、一種の舞踊、化粧、諂いであるように想像しました。そこにも私は同じ思想を見出しました。翌日への恐れです。お互いにおいては人間的完成に大きな関心がありながら、競争相手への憎しみもありますが、それに相応しいから憎むのか、相応しくないから憎むのかも少しも分かっていません。嫉妬によるこれらの矛盾が眠れなくして仕舞います。しかし注目すべきであると思われることは、これらの矛盾は認識が齎し、熱狂者は真の認識を渴望

していることです。というのも恋する人もけちな人も、疑わしい認識に耽ることはないからです。虚栄心は人が欲しているものを信じて夢中になるのを通して、情熱の始まりになるのは本当です。そこには本来的に陶酔に依存するものがあります。しかし、熱狂した人は直ぐに真の打算に到達して、極めて必然的に一種の眠りによって虚栄心に再降下します。それらの情熱においては何ものも安定していません。如何なる情熱も、情動と情操の間に自らの場所を見出さないものはありません。全ては刻一刻と変化します。盗みとか強姦の観念は、吟味を拒否している様なものです。しかし如何にして吟味を拒否するのでしょうか。全ての熱狂家は、金の重さを量る人なのです。

以上によって私が如何にして情動、情熱、情操という一連の重要な感情について研究したか、お分かりのことと思います。そして私は、情操が絶えず情動と情熱の上に乗せられることによってしか認めることが出来ませんでした。というのも、単に愛するとは如何なるものなのでしょうか。そして単に管理するとは如何なるものなのでしょうか。これらは生気の無い余りに安易な企てです。それは真理を恐れることなく、真理を愛するようなものです。静寂主義者は自らを美德と信じています。反対に真の信仰者は日に十回も神を憎み、そして否定するのを感じます。又、交易の真実を始めに吝嗇であることで憎まれ、そして常に憎まれていることを認めなければなりません。恋愛の真実も始めは恋人に憎まれ、そして常に憎まれていることを認めなければなりません。もう一度私は、宗教がまさしく意味の無い偶然の出来事と相違しているように思えました。そこでは現世に流れていた真実とは別の真実、別の価値が示されているのです。

中年の情熱である野心は、愛と吝嗇の間であって、情動、情熱、情操という三つの感情の中に最も入り込めないもののように思えました。それは結果に走り、何時も暴力的であり、そこに自分の愛する存在を見出すからです。しかし、それは何ものでもないと思います。私は一九三〇年代から手を付け始め、何度も書き続けた『ドゥニ又は野心家たち』の表題にもなっている対話で、野心家を打ち負かし、止めを刺すことを強く主張しました。この作品は幸福ではありませんでした。それが何時完成するかどうか分からないからです。でも私が、事物の弁証法を疑っているようなことはありません。それとは反対に私は、力を持った野心家たちが虚栄に余儀なく陥ることを何時も知っていました。野心とは説得することであり、遠くまで導きます。シラクサのディオニシオスとプラトンの口論は、一種の愛する者たちの口論です。吝嗇と愛する者のそれらの対話者たちは、沸き立つこの世での活力を全て持って来ていました。彼らが二人とも冷たく死んでいるのを私は恐れます。そこで私が思い出すのは他の一連の対談ですが、その表題は『音楽家訪問』です。それらの人物たちは、生まれて来るのに時間がありませんでした。それはベートーヴェンのヴァイオリン・ソナタを分析することを目的と見做して、私が正しいと思って分析的に解く鍵によって行うことでした。そして、その観念は人物たちを貪り食うようなものです。私が思うに、人は物語によってしか人物になりませんし、完全に不条理の連続です。そして私が野心家に戻るなら、彼は友情の価値を知るために余りに人を殺さなかったのであると私は考えます。(完)

- (1) モリエールの喜劇『人間嫌い』（一六六六）。
- (2) アルセストは、『人間嫌い』の主人公で、潔癖で正義感が強く、人間嫌いである。
- (3) セリメーヌは、アルセストが失恋する女性。
- (4) アルパゴンは、モリエールの喜劇『守銭奴』（一六六八）の主人公。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めつき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車1000mタイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人2000m速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ会員。時調の会・世界詩人会議会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレットタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『樞』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

金 得永（きむ とうくよん）

一九五六年大韓民国全羅南道新安郡生まれ。木浦、光州、ソウルで海を故郷に宗教に傾倒しながら育つ。一九七九年、光州教育大学を卒業。一九九一年、日本奈良教育大学大学院修了。一九九五年檀国大学校教育学博士号（日本研究）を取得。二〇〇一～二〇〇四年、日本の岐阜韓国教育院長に派遣勤務し、『古代からの韓日交流の歴史』出版。その後、『日本生涯学習都市フロンティア』、『日本の生涯学習まちづくり論』、『人性千字』、『教師のためのソ-シャルスキル』、『生涯学習まちづくり論』などを韓国で出版。二〇一五年から日本東京韓国学校の校長として赴任。子供たちが幸せな世の中、教室の中の幸福条件を整備中。目に見えない教育にも力を尽くしている。休日は、日韓古代史を中心とした神社や寺院を巡礼。古代人と、自然との対話を試みている。「ジュリアを讃えて」の詩は日本での処女作である。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノPSTA指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年

度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ会友、時調の会・世界詩人会議会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌「落」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。学生時代に同人誌「遡行」を発行。詩集は『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳は『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）など。共同編纂『齋藤忘詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九六年に個人誌「パープル」創刊（四〇号から電子書籍）、同年「風狂の会」会員になる。一九九八年に「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年から電子書籍（ブクログのpapier）に、随想集『アランと共に』及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』『文明国の戦争で真の原因になるもの』『神々』『神話序説』『家族感情』『わが思索のあと』などを登録中。日本詩人クラブ会員。

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

なべくらますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会 日本詩人クラブ 時調の会 各会員

櫛自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はら しげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）等。現在短編小説集『永遠の、地上の（仮題）』刊行準備中。典型的な「ウルトラマン世代」の「怪獣少年」で、齡知命に達した今もなお、心のどこかがその永遠の「神話」の森を彷徨い続けている。十代後半から二十代前半にかけてカルト的な宗教活動に没頭。その後フロイト、ユング、ラカン等の精神分析家の著作に傾倒し、一時は専門の心理臨床家を志したこともある。好きな書き手はJ.G.バラード、M.ピーク、尾崎翠、埴谷雄高等。絵画ならダリ、デルヴォー、バーン＝ジョーンズ、音楽ならドヴェツシー、ラヴェル、セロニアス・モンク等に魅かれる。日本詩人クラブ、日本短歌協会会員。

三浦 逸雄（みうら いつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークルCircro de bellas artesで人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。二〇一六年は京都での作品発表を予定している。

（以上）

読者からのコメント（2016年12月号）

アラン『わが思索のあと』（二十九） 高邁な心：高い意識・道徳心・情熱・愛などでしょうか。自由であることが幸福の唯一の幸福である。苦しみは何時も一種の喜びによって照らされているなど教えていただきました。理想な心と思いました。

詩人・作詞家・西條八十（四）：詞のいい歌が好きです。胸に響いてきました。西條八十のことをよく教えていただきました。学徒出陣や南京大虐殺も目の当たりに見たのですか。「おお現代」は胸にしみました。日本の歌の良さも知りました。ありがとうございます。

小人閑居の弁：雲を見るのが詩人なんて言っていられない現状に共感しました。来年1月からが不安です。どうしようもありません。また、知り得ないものを教えていただきました。

三浦逸雄の世界（十三の二）：坂道の家はさみしい気がします。

三浦逸雄の世界（十三の一）：イチョウの木のある道は明るい道でしょう。

光化門の魂の火：闇を照らす灯・道を照らす灯・平和の灯がある。終連のような灯を！

声を思考する人へ：色々な声があっても、終連のような声を希っています。

鎌倉・獅子舞谷の紅葉：紅葉の名所ですってね。光を浴びて紅く黄金色に輝く紅葉の道を哲学するなんていいですね～。

道づれ：誰でしょう。もしかして。

風の記憶：風と暮らして生きてきた今まで。終連に共感しました。

映画：お子さんたちと映画を観ている様子が見えるようです。子供には子供の、親には親の夢があるのですね。

老いた年金生活者の嘆き：私は滅多に駅を利用しないのですが、利用している年金生活者に、全く同じ心情を聞きました。現状をよく表現されていますね。

（以上）

同人誌 風狂 (ふうきょう)
第30号 (2017年1月登録)

<http://p.booklog.jp/book/112148>

編集：風狂の会 (担当：高村 昌憲)
編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ
<http://p.booklog.jp/book/112148>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社：株式会社トゥ・ディファクト